

キーワードは「the metal solution®」

独自技術で事業領域を広げる

金属技研

金属技研社長

長谷川 数彦



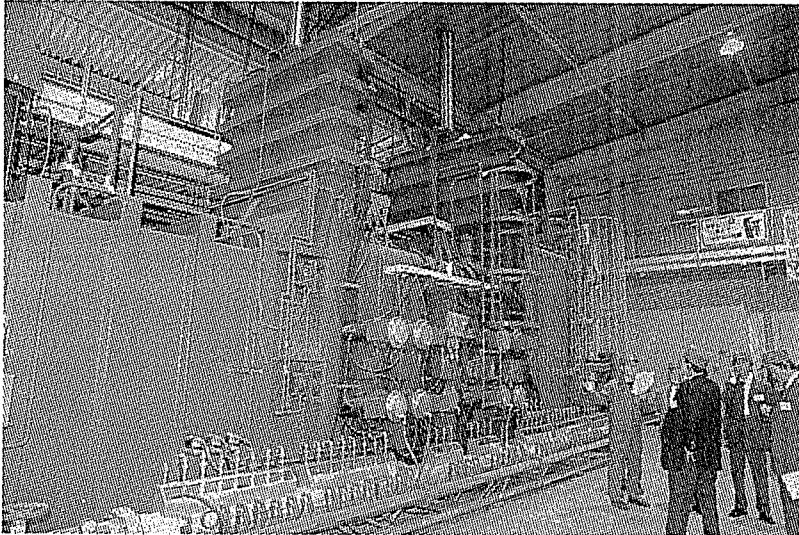
「環境」をテーマに新事業育成

金属技研は化学工学研究で磁性材料の熱処理やチタンの研究に取り組んでいた研究グループが、1960年に東京都板橋区で創業した。いわば理研発ベンチャーの一つである。ほどなく群馬工場(群馬県玉村町)を開設し、70年に真空炉を導入して防衛(航空)分野に本格進出。次いで滋賀工場(草津市、現在は滋賀県栗原町)を設置し、米

全国5工場体制

金属加工分野で独自の道を歩む金属技研(東京都板橋区、長谷川数彦社長、03・5365・3050)が、「the metal solution®」をキーワードに事業領域を拡大させている。単なる金属加工処理だけでなく、成形、接合、機械加工、さらには設計・解析などを加え、一貫したモノづくり体制を整備。これに伴い、全国5工場体制を2010年までの4年間で、100億円規模の設備増強に取り組みしている。2007年に工場棟を増築し、2008年春に最新鋭のHIP(熱間静水圧成形)装置を相次いで導入した茨城工場(水戸市)を紹介する。

茨城工場紹介



オルメタル(モリブデン)製高真空室式大型真空炉(上)。右は今回新設した茨城工場の外観

ポインティング社の認定に合格した。80年代に入り、神奈川県(神奈川県海老名市)、茨城工場、姫路工場(兵庫県姫路市)と相次いで工場進出し、全国5工場体制を確立。滋賀工場にHIP装置を導入し、HIP事業に進出した。90年代以降は姫路工場にマシンングセンター(MC)を導入して加工事業に参入したのを皮切りに、溶接、溶接、造形

HIP装置 充実

金属技研は2007年、茨城工場の隣接地9800平方メートルを購入し、HIP棟と機械加工棟を増築。各機能を新設した専用工場棟に集約し、従来の工場棟は熱処理機能と研削機能に特化させた。特にHIP装置は3

加速器分野に対応

茨城工場は半導体分野をはじめ、自動車部品、家電製品から航空宇宙産業まで、幅広く事業を展開してきた。ただ、大学・研究機関が集積する、つくば研究学園都市や東

無人化された加工環境の提供が不可欠

一方、ソディックの塩田会長は「工作機械市場は6兆円で、当社がかかわっている放電加工機はその10%程度だ」と紹介。主要輸入先である自動車、IT産業と、そのベースとなる金属産業の世界的潮流を解説し、「より精密で無人化された加工環境の提供が不可欠になる」と話した。

当社は3年連続で増収増益となりました。しかし、(1)景況が急速に悪化しつつあります。今期は大型投資の核となるHIP事業を強化する中で、厳しい局面を乗り越えるつもりです。新しい展開としては「環境」をテーマに、生産過程で発生する熱の再利用や材料面の研究など身近なところから取り組み、将来は新しい事業に結び付けたい。また、国家的なプロジェクトや他社との共同開発にも積極的に参加していきたいと考えています。

金属技研は5月30日に「第3回プライベートセミナー」を水戸市のホテルで開いた。日鉄金属の大橋建夫常務執行役員が「世界の半導体ターゲット市場の動向について」、ソディックの塩田成夫会長が「放電加工機の現状と将来」と題してそれぞれ講演。また、日刊工業新聞社の千野俊猛社長が「モノづくりのパラダイムシフト-制約条件を乗り越えて」をテーマに講演した。



日鉄金属常務執行役員 大橋 建夫氏

次世代の450ミリワイエハーに対応

日鉄金属の大橋常務執行役員は「半導体ワイエハー市場は26兆円といわれ、当社が生産する半導体ターゲット市場は500億円程度と、いわばニッチ市場。競合と変化が激しく、利益を上げるのが難しい業界だと述べている。



ソディック会長 塩田 成夫氏

コスト削減が要求されている(2)を指摘し、そうした要求にこたえられる次世代の450ミリワイエハーに対応するターゲット材の実用化にめざすことを強調した。



日刊工業新聞社長 千野 俊猛

これに対し、ソディックはナノメートル精度を実現した加工機で、時間当たりの加工コストを大幅に下げることが推進中。「ワイエハー」を推進中。ワイエハーを組み合わせたハイブリッドワイエ放電加工機やゼロ消費電極で、ニーズにこたえていきたい」と述べた。